

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 29 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520535

研究課題名(和文) 中上級日本語学習者のモニタリングの基準の意識化と内在化を目指した教室活動の開発

研究課題名(英文) Educational Methodology Designed for Pre-Advanced Japanese Language Learners that Focuses on Raising Consciousness and Internalizing the Monitoring Criteria during Oral Presentations

研究代表者

衣川 隆生 (KINUGAWA TAKAO)

名古屋大学 留学生センター 准教授

研究者番号：30282289

研究成果の概要(和文)：本研究では、中上級レベルの日本語学習者の口頭発表におけるモニタリング能力を育成することを目標としてデザインされた教室活動の効果、妥当性を検証した。その結果、相互評価活動を繰り返し行うことで、モニタリングの基準の意識化が促進されることが示された。さらに目標設定、口頭発表、モニタリング、相互評価というメタ認知過程を繰り返すことにより、モニタリングの基準の精緻化、構造化が促進され、モニタリング能力も向上することが示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the effectiveness the educational methodology for pre-advanced Japanese language learners that focuses on enhancing monitoring skills during oral presentations. As the result, (1) the peer evaluation activities enhance the awareness of monitoring criteria of oral presentations, (2) the metacognitive cycles of "Goal setting", "Oral Presentation", "On-going Monitoring" and "Mutual evaluation" facilitate elaborating and organizing the monitoring criteria and promote students' monitoring skills.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：メタ認知知識・メタ認知活動・モニタリング・第二言語学習者・相互評価

## 1. 研究開始当初の背景

口頭発表の過程は、発表者が伝えたいメッセージを受け手と共有していくための課題解決過程である。このような課題解決能力を身につけていくためには、適切な文脈下でテキストを産出するだけでなく、学習者自身がその課題解決をモニターすることが不可欠である。このモニターには大きく分けて進行中の課題遂行過程をモニターし、逐次的に

調整を行う進行モニタリングと、課題遂行終了後に課題達成度などをモニターしその効果や課題を評価し、次回の目標を計画する反映モニタリングがある。語学教育においては、反映モニタリングの応用例として、教師やピアからのフィードバックに基づいて書き上げた文章を評価し推敲を行う教育実践や、発表後のフィードバックの方法や効果に関しては数多くの実践報告が行われてきている。

しかしながら、課題遂行者自身が進行中の課題遂行をモニターし、その評価結果に基づいて時々刻々目標やプランを改変していく進行モニタリングに焦点を当てた教育実践報告は少ない。

中上級レベルの日本語学習者が口頭発表時にこのような進行モニタリングを適切に行うためには、第一に、モニタリングの基準となるメタ認知知識が内在化されていること、第二に、その基準が参照可能な形で意識化されていることが前提条件となる。しかし、日本語学習者の場合、基準となるべき情報が教師などから与えられていても、それらが整理され参照可能な形で内在化されていない場合も多い。さらに、上級の学習者であっても話している段階では「どう日本語で表現するか」に作業記憶容量の大半を使ってしまい、モニターし評価するための余裕が作業記憶内にない可能性も高い。

そこで、相互交渉を通して発表者が伝えたいメッセージを受け手と共有していくことにより、関係する知識の意識化、精緻化、構造化が促進されるという先行研究の知見に基づき、口頭発表に関わるメタ認知知識を意識化し、意識化された情報を他者へ伝えると活動を行うことによりモニタリングの能力の育成を行う教室活動を計画した。具体的には1)「いい口頭発表とは＝発表の評価基準」、2)「いい質疑応答とは＝質疑応答の評価基準」というテーマについて口頭発表を行うというものである。そのテーマは内容がそのままモニタリングの基準と一致するため作業記憶の負担軽減が図れること、第二に伝えたいメッセージを聞き手と共有しようとする過程で発表者が漠然と持っているメタ認知知識の意識化、内在化が促されること、第三に学習者がメタ認知知識として持っている基準を教師が把握することができる。口頭発表後には、自分自身で作成した評価基準に基づいて自己評価を行い、その結果を基に次の発表における目標を再設定する。この過程を繰り返し行うことにより、1) 教師から提示された評価基準ではなく、学習背景、日本語能力、専門分野が異なる受講者が自分自身の目標に応じた評価基準を内省的に確立できる、2) 受講生がお互いの評価基準を紹介し合うことで、自分自身の評価基準の見直しが行われ、評価基準を広げるきっかけになる、3) 今後の発表の準備、発表時の進行モニタリング、発表後の反映モニタリングなどメタ認知能力の育成を促進させられる、という効果が期待できる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、中上級レベルの日本語学習者のモニタリングの基準となるメタ認知知識表象を抽出する資料の収集方法と分析

方法を確立すること、確立された資料収集方法、分析方法により、教育方法が学習者のメタ認知能力の育成を促進しているかどうか、促進している場合にはどのようにメタ認知知識とメタ認知制御の促進に効果があるのかを分析することにある。その結果に基づいて、中上級レベルの日本語学習者のメタ認知能力を育成する教育方法を提案する。具体的には、以下の5つの課題を明らかにする。

(1)中上級レベルの日本語学習者のメタ認知知識の表象についての資料を収集する方法論とその資料収集方法を確立する。

(2)中上級レベルの日本語学習者が学習の初期段階において、以下の項目についてどのようなメタ認知知識の表象を有しているかを明らかにする。

①よい口頭発表とはどのような発表か

②よい質疑応答とはどのようなものか

(3)上記(2)の項目に関して、相互交渉を前提とした言語表現化を実施することにより、中上級レベルの日本語学習者のメタ認知知識の表象がどのように変化していくかを明らかにする。

(4)通常の口頭発表技能育成を目標としたコースを受講した中上級レベルの日本語学習者のメタ認知知識は、コース終了時にどのように内在化されているかを明らかにする。

(5)上記分析結果に基づき、日本語学習者の口頭発表に関するメタ認知能力の向上を図る教育方法論を提案する。

## 3. 研究の方法

(1)分析・報告

① 認知心理学、教育学、日本語教育学における知識表象測定に関する先行研究を収集、分析し、中上級レベルにある日本語学習者のメタ認知知識の資料収集方法の枠組みを検討する。

② 認知心理学、教育学、日本語教育学における知識表象測定に関する先行研究を収集、分析し、資料分析方法の枠組みを検討する。

③ 上記分析に基づき、中上級レベルにある日本語学習者のメタ認知知識表象測定の資料収集方法、分析方法を設定する。

④これまでの教育実践で収集した中上級レベルの日本語学習者の口頭発表(50時間相当)のデータを電子化し文字化し、イントラネットサーバー上のハードディスクに全ての映像資料を保存し参照可能とする。

⑤ 文字化された資料をアイデアユニット(IU)単位で分節化し、分類タグを付与する。

⑥ 設定した分析方法に基づき、上記資料を分析し、これまで行ってきた教育実践方法の問題点、効果を確認する。

(2)授業実践に基づく資料収集

① 開講時に、受講者の口頭発表に関わるメ

タ認知知識の表象を測定する。資料収集は、アンケート調査、インタビュー調査を行う。

② 授業実践の方法論に基づき、授業を実施する。教室において発表は全て映像記録に、教室内の発話は IC レコーダーを通して全て記録に保存する。また、提出原稿、自己評価結果、学習経過報告等はポートフォリオ用サーバーに全て記録する。

③ 授業終了後、再度、メタ認知知識に関する資料を収集する。

### (3)資料分析と報告

① 開講時、授業終了時、実践過程で得られた映像記録は、全て電子化し、文字化、分節化、分類タグ付与を行う。

② 資料分析を行い、実践方法の問題点、効果を検討する。

## 4. 研究成果

実践を通して収集した学習者の口頭発表、学習者協働の相互評価の映像記録を文字化した。映像資料、文字化資料を利用し1)日本語学習者が学習のコース初期段階において、どのようなメタ認知知識の表象を有しているか、2)口頭発表を通して、日本語学習者のメタ認知知識の表象がどのように変化していくか、3)コース終了時にどのように内在化されているかを分析した。その結果、第一に態度、表情など非言語的な基準や「ポーズ」、「話し方のメリハリ」など意識しにくい基準が抽出されにくいこと、第二に発表を重ねても「モニタリングの基準」の表象が構造化、精緻化されていないことが明らかとなった。そこで発表後に再度グループで、お互いの基準を出し合い、それを整理、統合する協働活動を組み込んだ。その上で、整理された基準を評価基準としてグループで相互に評価を行う活動を組み込んだ。その結果、モニタリングの基準が整理され徐々に構造化されたことが学習者の評価票からも観察されるようになった。2011年度においては、確立された授業実践の方法論に基づき、コース運営を行い、それを通して、受講者の到達目標、口頭発表に関わるメタ認知知識の表象を収集した。コースでは学習者が他者との対話を通して到達目標となる「口頭発表の評価基準」を作成し、口頭発表を行う際には、評価基準を意識しながら発表者も聞き手も実践状況をモニターし、相互に評価しあう活動を行う。分析においては、学習者がどのように評価基準に記述された概念の理解を深めていくかを明らかにするため、評価基準作成の協働活動、発表時の相互評価において、学習者がどのような「ことば」で「口頭発表の評価基準」について対話を行っているか、そして、その「ことば」がどのように変容していくのかを分析した。その結果、モニタリン

グの視点を固定することによって、従来意識化を促すことが難しかった基準に対する気づきが促進され、口頭発表を繰り返すことでこれらの基準が徐々に精緻化されることが明らかとなった。さらに、準備段階では辞書的・宣言的な概念であった基準や行動目標が、発表、モニター、評価を協働で行うことによって徐々に精緻化、具体化、体制化されていく概念があることが示された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ①衣川隆生(2012)「対話を通じた学習者による評価基準の作成とその変容-口頭発表技能育成のコースにおける実践から-」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第19号, 名古屋大学留学生センター, pp. 89-121. (査読あり)
- ②衣川隆生(2011)「協働作業を通して口頭発表のモニタリングの基準はどのように変容するか」『異文化コミュニケーションのための日本語教育-2011年世界日本語教育研究大会論文集(2)-』高等教育出版, pp. 440-441. (査読あり)
- ③衣川隆生(2011)「中上級日本語学習者の口頭発表における目標表象と評価内容の分析」『日本語教育方法研究会会誌』, Vol. 18, No. 1, pp. 52-53. (査読なし)
- ④衣川隆生・森仁美(2010)「口頭発表技能の到達目標と学習計画の精緻化を目指したコースデザイン」『日本語教育方法研究会会誌』, Vol. 17, No. 1, p. 60-61. (査読なし)
- ⑤森仁美・衣川隆生(2010)「自己モニタリングの基準の意識化を促進する他者評価の在り方」『日本語教育方法研究会会誌』, Vol. 17, No. 2, p. 26-27. (査読なし)
- ⑥衣川隆生(2010)「モニタリングの基準の意識化を促進させるための協働学習のあり方」『日本語教育方法研究会会誌』, Vol. 17, No. 1, p. 36-37. (査読なし)
- ⑦衣川隆生(2009)「自律学習を顕在化させるための学習環境デザイン」『第18回小出記念日本語教育研究会論文集18』, p. 116-121. (査読あり)
- ⑧衣川隆生(2009)「自律学習能力の顕在化を目指したコース運営-模擬面接と学習経過報告を通して-」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第16号, p. 79-97, 名古屋大学留学生センター. (査読あり)
- ⑨衣川隆生(2009)「学習要因の意識化を目指した教室活動の検討」『日本語教育方法研究会会誌』, Vol. 16, No. 2, p. 54-55.

[学会発表] (計2件)

- ①衣川隆生(2010)「自律学習を促進するため

に教師が果たす役割-日本法教育研究センターにおける教育を事例として-」，中央アジア地域の留学生受入強化と教育研究充実に  
向けた国際シンポジウム，2010年7月15日，  
於筑波大学

②衣川隆生(2009)「書く」ことがもたらす  
もの-自律学習能力育成に向けて-」第33回  
日本語教育方法研究会，2009年9月26日，於  
弘前大学

〔図書〕(計1件)

衣川隆生(2009)「メタ認知知識の外言化がも  
たらすもの-モニタリングの基準の意識化と  
内在化を目指して-」『日本語教育の過去・現  
在・未来 第3巻 教室(小林ミナ・衣川隆生  
(編著)水谷修(監))』凡人社, p.69-93.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

衣川 隆生 (KINUGAWA TAKAO)

名古屋大学 留学生センター 准教授

研究者番号：30282289